第一巻第九号

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子 第一巻第九號 明治三十八年二月一日發行

社説

加奈陀青年女子の代表者として新に日本に來られたるマクドナルド孃より、一通の開書を本月の紙上に寄せられたり。

◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦

『印度及び錫蘭の青年女子』と題するは、印度、緬甸、ビルマ、錫蘭の基督教女子聯合青年會委員の手に成る月刊雜誌なり。本號英語欄の説話は、この雜誌より拔載するものなり。因みに、この青年會に屬する青年女子は四千乃至五千を以て數へ、その內學生は五百人以上に達すといふ。

また『印度の青年』といふは、印度基督教青年會の機關雜誌にして、恰も日本に於ける同青年會の『日本の青年』に於けるが如し。

◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦

合衆國に於ける千九百年の人口調査報告を見れば、職業の種類別三百三種を擧げたる中に、婦人の働者なきもの僅に八種に過ぎず。想ふに婦人の地位だけより觀る時は、米國は實に『自由の國』と云ふ得べし。

◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦

米國內亂の當時（一八六〇年）、女學生を有する大學は僅に一箇所に過ぎざりき。然るに今日に於ては、女子の入學し得る大學及び分科大學は四百五十以上に達し、而してその學生總數の三分の一以上は女子なりとす。合衆國に於て大學教育を受くる學生は、男子千人に三人、女子千人に一人の割合なり。

◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦

日露戰端を開くの不幸に會することなかりせば、昨年の九月は正に東京に於て世界學生基督教青年同盟會

議の開設を見るべかりき。その名の示す如く、この機關は全世界に於ける青年男女學生基督教青年會の同盟にして、その中には獨逸、英國、米國、加奈陀、スカンヂナウイア、和蘭、佛國、瑞西、濠洲、南亞弗利加、日本、支那、印度、錫蘭の青年會を抱括す。而してこの同盟に加はれる青年會の數千六百にして、その會員は、教員學生合せて總數八萬九千人に達し、今日存在せる學生の團體にして、かくの如く大なるものは、いづこに求むるも得べからずと。この大運動の幹事モット氏のいふ處に依れば、更に心地よき一事實なり基督教信者の割合は、普通人民の中に於けるよりも、遙に學生の中にその多數なるを見ると。今これが適例を擧げんか、合衆國の如き、一般の青年中基督信徒と名のるものは、十二に對する一の割合に過ぎざるに反し單に大學々生のみを以て比例すれば、信者は二に對する一以上に相當すといふ。これ即ち、大集團を以て基督の下に馳せ來るものは、思想ある青年男女たる事を證明するものなり。

二月十二日設、青年會同盟が學生のために特に指定したる祈禱日なり。日本に在る我等は能くこの日を記憶し、世界幾千萬の青年と共に、本年多くの學校及び大學に基督の道開けて、多くの學生が信仰の心を喚起するに至らんことを熱心に祈るべきなり。

○　○　○　○　○　○

米國の某大學長が筆せる次の談話は、斷えず努むる事に倦める人々に多少の慰籍を與ふるを得べし。彼曰く、

「數年前、予は滊船に乘じて、マキナックの北方、大湖水を經て渡航したることありき。冬日この邊は暴風極めて烈し。予船長に向つて曰く、

「この邊の冬の嵐は如何に。氣味わるき事にあらずや」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

船長は、

「誠に左なり。昨冬恰も此處にて東南の風に遇ひしが從來曾てなき所の烈しき嵐にて、而かも其の暴風の眞中に翻弄せられたるなり。」

「其の時如何にせしぞ。」

「船首を風上に向けて進みたるのみ。」

「而して後？。」

「猶も船首を正面に向けて進みたり」

「そはまた何の意ぞや」

「されば、一晝夜の間わらん限りの蒸氣力を盡して喞子を働かせ、火夫も一生懸命に石炭を投じて、僅に船の鼻を嵐の眞只中に押し込み、一歩を進み得ざるも斷じて船の方向を變せざらんと勉めたり。これ方向を變ずれば忽ち浪と浪との間に覆沒するを免かれざるに因る。此時に當りて我等の取るべき方法手段は嵐の方向に船の鼻を突込むより外あらざりしなり。」

爾來予はおのれの學生に接する毎に必ずこの船長と滊船とを想起せずんばあらず。而して予は學生が道德的品性を修養するに、等しくこの見を抱持せんことを望む。即ち人生の狂風怒濤に接しては、敢て逃避することなく、進んでこれと戰ふの一事あるのみ。」

開書

小妹が貴國に渡來するに臨み、海のかなた、加奈陀に於ける幾百の青年女子より諸君によろしく申出で、かつその傳言の中には、よろこばしき期望の存することを御認め被下度候。これと申すは、青年女子諸君の感化力が、そのいつくしむ日本國民を導いて、この世界にイエス、キリストの王國を完成する一大勢力とならしむるに至るべきを知悉せる故に候。なほ又加奈

陀の靑年女子が、なほ一きは懇ろに諸君に敬意を表する所以のものは、我等が國家的存在を確立せること、恰も貴國の維新改革に先つこと一年にして、兩者等しく新國民たるからにて候、かつ我等は更に他の同盟の關係をも有し候。即ち加奈陀は大英國の一部にして、英國が貴國に對する友情は、兩三年前に締結せられたる日英同盟によりて公然認識せられたる次第に候。而して貴國は上に天皇陛下を戴き、弊邦はまた國王陛下を奉じ、何れもその忠良なる臣民によりて畏愛せられ給ひ候。かく彼我の間を繋ぐ幾多の連鎖を有する加奈陀の靑年女子は、極めて熱心に、貴國をして眞に偉大なるものたらしめんとする諸君の働きを熟視致居候。

既に厚情と眷顧とを小妹の上に垂れたまひし諸君と御交誼を開かんとするに臨み、小妹は果して何を以て諸君に告ぐべきや。即そは左の一事に過ぎず候。想ふにすべての民、すべての國――彼等が自ら從屬するを以て光榮とするおのれの國さへ――の上に臨む唯一の統治者王の王、主の主、すべての權力を超越する者有之候彼は何れの日か、必ず全世界に於けるおのが民の心を支配し給ふべく候。この大王宣べていひ給はく、『わが國はこの世の國にあらず。』彼は人々の思想を支配し人々の行爲を指導し、以て彼等に誘惑と罪惡とを制服し得べき力を與へ、また他人をして、彼等の衷に基督らしき性格の發揮せられたるを讃嘆して、おのれもまたこの王の如くならんことを欲せしむるほどに、高潔無私の生涯を送ることを人々に訓ふべし。蓋し基督の王國に於ては、その民がみな生育して漸次王に似ることを得候。基督は眞理の王にて候。その在世の時人々に告げて曰く、『わが臨れるは眞理について證をなさんがためなり。』されば我等にして若しその王國の民たらば、我等はいつか基督に似ることを得べく候。また基督は愛の王にて候。彼曰く『人その友のために己れの命

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を損つるは、これより大なる愛はなし。』かくて彼は世界の救のために、自らその命を棄て給ひ候。我等もその鴻大無私の目的を追うて、他人のために生命を献ぐるによりて、基督に似ることを得る次第に候。

基督が我等を招きいれ給ふ王國に於て、我等はおのが心情の要求を悉く充足せしむることを得候。日本に於ける幾多の青年女子諸君は、今正に學術世界に向つてその滿足を求めらるゝ最中に候が、かの人間の智識を窮め得たる保羅は、曾て王の王たる基督について語つて曰く、『智慧と智識の蓄積は、一切キリストに藏れあるなり。』基督に來るものは眞誠なる生活の秘訣を學び得べきも、智識に依りて之を悟らんとするは困難なる事に候。主またおのれに從へるものに告げて曰く、『わが來るは汝等をして命を得、かつ豐かならしめんがためなり。』

されどすべての人々の心には、なほ一きは切なる希望の存するもの有之候。これ神を求むる靈魂の渴仰にして、我等は絶えず世界の背後に立ちて、これを治むる活ける大統治者と交らん事を願ひ、世の事々物々が果して何者かによりて支配せられ、かつこれらのもの互に相働らて、益を爲せるや否やを知らんことを欲し候。

現在はいふも更なり、行末とても明かに見ることを得ざれば、わが道の定かならざるを懼れ候。主耶蘇おのれに從ふものに告げて曰く『われは世の光なり、我に從ふものは暗中を歩かず、生命の光を得るなり。』我等は祈禱を以て彼に接し、彼は我等の言を聽きて、これに應へ給ひ候や。『わが名のために二三人の集れる處には、我もその中に在ればなり。』我さきに爾曹を友と呼べり。我なんぢらに我父より聞きし處のことを盡く告げしによる。』

我等は如何にして大なる王基督に仕ふるを得べきや

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

といふに、我等の生命の裡に、主が驚くべき變化を生ぜしめ給ふを信じ、進んで基督の下に行き、以てその忠節を献ぐるの外之なく候。『我に來るものは我これを捐てず』。即ち信仰を以て主の下に來れる我等は、皆な基督を以て、わが求むる處を豐かに與ふる救主なることを證言するを得べく候。わが愛する日本の青年女子諸君願くば我等共に祈らん、日本の勇しき青年女子諸君が世界の青年女子と連結し、心を一にして神を拜するの日速かに到來せんことを。『我等はイエスを見ざれども、これを愛し、今見ずといへども信じて喜ぶ。その快樂はいひ難く、かつ榮光あり。』そは我等信仰のしるし、即ち靈魂の救を得るによる。』

エー、カロライン、マクドナルド

日本青年女子諸君

聖書研究

第六週　第六日

信仰の力　（馬可四〇三十一三十二）

（本題は本田増次郎氏より寄稿の約束ありしも、同氏病氣のため之を掲ぐるの運びに至らざりしは甚だ遺憾とする所也）

第七週　第七日

馬可傳五章一―廿

エッチ、ケー、ストレーン

この猛き惡魔に憑れたるものは、いかにも世に類なきさまに見ゆれど、深甚なる意味に於て、靈魂の失墜墮落せる點よりいへば、これ正に新に生れざるすべての人の狀態を寫せるに過ぎず。この憐むべき病者は、單に身體の病症に惱むにあらずして、精神の邪惡に苦められ、殆んど自己の個性を亡失せるが如し。人は自ら顧みて、幾多の兇惡なる刺衝、肉情、食慾等によりて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いかに己れの個性が抑壓せられ、阻礙せられ、束縛せらるゝかを知らば、今更の如く驚くなるべし。かゝる情慾は、わが特性を滅却し了るものなり。

この惡魔に憑れたる人に關して、實際に適切なる二個の思想あり――第一、放免、その實は基督に繋がるゝの意――第二、おのが棄てゝ離るゝ處のものを、おのが離れて屬する處のものよりこれを見れば、眞にその醜陋なるを悟る。即ち墓間を離れて、基督に屬するをいふ。然かもかゝる際に、我等は自ら揚言して曰く、われは犧牲を献げたりと。

耶蘇いやされし人に語つて曰く、往きて主の爾になしゝ『大なる事』を告げよと。誰にても自ら大に基督の行を尊ぶことなくんば、他人をして亦た同じくこれを尊ばしむることを期すべからず。ガダラ人が二千匹の豚を失ふを以て、人間の救濟せらるゝよりは、更にその損耗の大なるを悲める醜汚貪婪の心は、尙ほ未だ世に滅絶するに至らず。ある人は酒商を廢する能はずとて基督を拒げたり。

家政

日本の家屋

柳澤米子

家屋の建築は、多くの人の心を苦むる問題なり。今これについて如何なる點に注意すべきか、聊か玆に述ぶる處あるも、敢て無益の業にはあらざるべし。されど如何なる家屋を建築すべきかといふが如き、一般の方法に至つては、わが玆に説かんと欲する處にあらず只おのれの觀察より得來れる二三の事柄を記して、世人の參考に資せんとするのみ。

家屋の位置を選擇するは、なか〳〵思ひに任せぬ事なれど、濕氣ある低地は成るべく避くるを良しとす如何なる土地も、表面より堀穿して一定の距離に至れば、その底に必ず水あるを見る。而してその水までの距離を確めんと欲せば、最寄の淺き井に臨みて、水面に至るまでの深さを測り、以て容易にこれを知ることを得べし。肺病の如きは、多く濕氣過分の土地に起るといふ。また僂麻質斯も、濕氣多くして容易に乾きにくき土地に發生することは、我等がよく知れる處なり濕氣ある土地に可溶性植物質を含有する時は、マラリヤその他の熱病は、夏の末の方より秋にかけ、暖氣の力によりて發生し易し。

土地の排水には極めて心を用ゐざるべからず。いかに乾燥せる土地といへども、排水の法備はらざる處はこれを用ゐざるを良しとす。多くの場合に於て、下水の仕掛け宜しきを得ざるものあり、掃除の行屆かぬ溝渠は、その附近の土地をして數多病毒の養成所たらしむ。

黃塵萬丈の都會よりかき集めたる廢物や、屑片より成れる土地は、また勉めて避けざるべからず。米田を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

塡めたる土地に於ては、これが全く乾燥して、堅くなりたる後にあらざれば、用ゆべからず。マラリヤ及びペリペリの伏在する土地は、昔時米田若くば沼澤のありし處なりといふ。

選擇する土地の附近の狀態をも考慮せざるべからず。若し附近に沼地またはよどめる池などある時は、有機物の漸次腐敗して、これより生ずる災害を蒙ることあるべし。我國に於ては各所に墓地の散在せるを見る。かゝる墓地に接近して、家屋を建築するの已むを得ざる場合には、飲用水に供する井を、成るべく新しき墓所より隔離して設くるやう注意すべし。製造所、學校、及び商業繁華の地に接して家屋を構ふるは、喧しくて却つて便ならず。茲に家屋の建築に適せる理想的位置をいはゞ、都會よりあまり遠からぬ高燥の地に、廣大なる園圃を備へ、家屋に密接せずして、多からぬ樹木の程よく立てる所などこそよかるべけれ。

家屋は地面より床まで、少くとも凡そ三尺の距離を保ち、石を以てその礎とするを善しとす。我國に於ける多數の家屋は、その床をあまり地面に接近せしめ、礎さへ甚だ薄弱なるを以て、濕氣床を侵すが常なり。從つてこれに住するものは、濕氣ある疊上に起臥するの已むを得ざるに至る。その結果、種々の病氣に罹るも亦た宜ならずや。

家屋は東向に建つるが善し。然らずば寢室だけなりとも然かすべし。蓋し夜中戶を閉づるの結果、室內の空氣不潔になるを以て、朝日の光を納れ、これを新鮮にするの必要あるを以てなり。また寢室は人數に應じて、充分空處を存せざるべからず。

我國の家屋は、空氣の流通あまりに善すぎるか、或は全く流通せざるが多し。朝來起きいでゝ、前夜休息の時よりも、却つて疲勞を覺ゆることあるは珍しからず。これ屋內換氣の行はれざるがためなり。而して我邦

人は少量の空氣が、如何なる變化を來たすものなるか殆んと悟らざるもの丶如し。

盛夏の候、我國の家屋は、晝間はあけ放ちて、充分涼味を納るゝに足れど、夜間に至れば、閉ぢずにをくことを得べき窓なきを以て、箱詰にされて、その苦痛を忍ばざるべからず。冬は室内を温かにすべきなれど我國の家屋は隙間多くて、冷き風を導き入るゝが故、温氣を保ち難し。紙障子は充分風の侵入を防ぐに足らざれば、椽側にガラスの戸を備へ、室内に煖爐を置かざるべからず。各室また上邊に小窓を設けて、夜間空氣の流通を自由にすべし。かゝる室も間々見受けざるにあらず。されど新鮮なる空氣を納れんがため、雨戸の上に小窓を設けたる家屋に至つては極めて稀なり。

日常家族の生活する室は、極めて明き、日向よきを用ゆべし。客室の如きは、ときたま用ゆるものなればさまで關心するの要なし。されど良き室は、家族の健康を支持するに大切なり。

快活と健康とを助くる家屋は、國民の繁榮を來たすべき緊要なる一要素といふべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

WHAT CAN'T BE LEARNED IN HEAVEN.

Some day you will never have anything to try you or anybody to vex you again. There will be no opportunity in that happy realm to learn or to show the spirit of patience, forbearance and long-suffering. If you are ever to learn these things you must learn them now.

And oh! when you shall see those glorious jewels shining in some one else's crown which were formed out of tears of sorrow and drops of blood, what would you not give to be able to live your life over again and win the recompense which can only come from trial and suffering? —*Matthew Simpson.*

BEING A MESSENGER.

She couldn't stop because she had to meet the train, the girl declared, but she was not going to pass without looking in just to see how everybody was. Well, yes, possibly she could stay five minutes, if that was anything, but not a single second over, else that dreadfully punctual train would come and go, and poor Elsie be stranded in a strange village without a soul to meet her.

The girl dropped down on the top step with a pretty fluttering of her dainty summer gown. The two old ladies looked at her with gentle, admiring eyes. She wasn't any of their folks; they had no folks but each other; she was only a girl who had seen the loneliness in their faces one day, and after that had somehow gotten into the habit of "running in" for five minutes or ten, or, on rare occasions, half an hour. It was the shortest visit this time because of the train—only five minutes of merry, girlish chatter, with a little caressing touch of the soft, wrinkled old hands when she left, but it was enough to brim the day with content.

Miss Eliza looked after her lovingly. "She just carries a blessing wherever she goes," she declared.

To be a girl of eighteen, with a girl's merry, winsome ways is not given to anyone for very long; and there are girls, sad, lonely, shut-in and shut-out girls, who are eighteen, without many of the pleasures that, to their wistful thought, belong to girlhood. But the heart of it no one need miss, at eighteen or eighty; for always wherever we go, up or down life's ways, God has a blessing to send by us; no one can be too old or too plain or too poor to be God's beautiful messenger. Yet how many times we start out on the day's duties and leave the blessing behind—forgotten!

Forward.

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

back after a long walk with specimens of rocks and fossils to add to their collection: or, perhaps, you may find her out before sunrise, peering cautiously among the trees and bushes that she may discover some shy songster, who is bursting his little throat in his unconscious heralding of the dawn. Book and pencil in hand, the true student is jotting down field observations for her report in the Ornithology class.

To many college girls the most interesting as well as the hardest work is that done along literary lines. The gift of expression is not easily acquired. In some colleges there are especial classes in composition and theme writing where every day a short essay on an assigned topic must be prepared. Aside from the required literary work there is the opportunity for more independent work in the college literary societies. Here the young women meet every week—not for social diversion but for hard work.

Extemporaneous speaking, conversation on the news of the week, orations, essays, stories, debates, and drill in Parliamentary Law,—all are a part of the program of these literary societies. Many a girl finds when she leaves college, that she owes more to the poise and training gained through her literary society than to any other part of her college work.

For those especially gifted in writing there are opportunities for development in the editorship of the college magazine which must be done in addition to the regular college studies.

The life of the true college woman is made up of hard work, but work into which she puts her whole heart, so that the drudgery is almost forgotten in the eager striving after the goal of all true education—character.

Mrs. C.B. Olds.

COLLEGE GIRLS VOTE.

In order to gain an insight into the practical workings of politics the girl students of Barnard College held an election on the day when the American people cast their ballots for the President. Previous to the event the young women had made a careful study of the routine of election procedure, and the balloting was carried on in the same way observed at a regular polling place. While few of the girls express a desire to be actual voters in the great national contests, they were all eager to learn something of the actual practice of the rights of citizenship. It is a promising sign when young women take an interest in the welfare of their country.

Young People's Weekly.

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

paper, attached to the ribbon, bore the brief wording, "If the King's Daughters are close to Him, can they be very far from each other?"

—*The Young Women of India and Ceylon.*

O give thanks unto Jehovah; for he is good. Psa. 106. 1.

Gifts received for the "Young Women of Japan" since April, 1904.

From the Promoting Committee	*Yen.* 47.50
From the American Department of the World's Committee	201.17
From friends in Japan	66.25
From other friends	33.00
Total	347.92

Jehovah hath been mindful of us; he will bless us. Psa. 115.12.

THE COLLEGE GIRL AT WORK.

The high-grade American college of to-day stands for real scholarship, and all who enter its halls and enjoy its privileges, must have this spirit or they cannot keep in step with the rank and file of its students. The true college woman, as she takes up the life and duties of the college, must have a genius for hard work.

There can be no late rising for the true student, an early breakfast and then she is off for the class-room. Here we find her demonstrating difficult problems in mathematics, for which she may have spent hours in preparation. In the Greek and Latin classes, as one listens to flowing translations of the classics, it is hard to realize that these are the results of hours of study. Looking into the History class room, we may find the professor giving a lecture to the class, all of which the student must be able to reproduce in her own words the following day, or use later in preparing a paper for part of her class work. Visiting the Science building, we find a group of busy girls, working under the direction of their teacher, performing some interesting experiment in Physics or Chemistry. In the laboratory others are working independently, intent on discovering some of Nature's laws.

But the college woman does not do all her work shut in by four walls. There are long delightful tramps in the woods and fields, gathering flowers and ferns for study at home and for the class room. One may meet a group of young women starting out with their geology hammers, coming

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

"There are so many of you, there ought to be just so many happy mothers; oh! yes; I know they are glad, proud mothers now, rejoicing in your youth, beauty, and ability; but are they so happy that you can add naught to the gladness? Need I tell you how! Ah! there are so many ways!

"Said a mother once, on receiving some loving demonstration from a generally undemonstrative daughter, 'I didn't know you cared for me like that!' Do you wonder at that daughter's repentance that she had so little shown her heart's depth of caring! Do not be ashamed to show how much you love the dear one. Show it in word, and look, and tone. '*Not used to it*!' Oh! girls, get used to it at once; the hours fly fast, and the day that sees your repentance for love unshown, may be too late for aught save unavailing tears.

"Girls are so thoughtless," said a lady in my hearing. 'Yes, but girls are so loving, too, was my unspoken comment. Take part of the responsibility from mother's shoulders; show her that you can be trusted to perform some of the numberless duties; that it might be possible for you to oversee the preparation of the morning meal occasionally if necessary, so that she may be spared. Plan for her comfort. Do you ever stop to think how she plans for yours, that there may be no jarring in affairs, should you unexpectedly bring some of your companions home to dine with you, or spend the evening? She sees that nothing interferes with your intended outing, even though the home duties be many and irksome. Can you not arrange so that the pleasant little trip in the cool of the day may fall to her share instead of yours? Your thoughtful care may, humanly speaking, add years to her life.

"Help and strengthen and keep her young by giving her your unreserved confidence. To whom better can you go for advice, for comforting, when plans go all awry? So shall you come very near her loving heart, and learn in some measure, the fulness of the sweet old promise "As one whom a mother comforteth, so will *I* comfort you.'"

The tender voice paused and then went on, "Oh! girls, you know it all. Forgive if I seem to speak too earnestly, but I want you each to know—to *realize* the glad privileges within your grasp"

The little silver clock chimed forth the hour as Cousin Hope paused, and the girls separated with thanks for the loving words.

* * * *

Beside Marian Kent's plate on New Year's morning lay a tiny bunch of pansies—a wee slip of

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

"How faithless I am growing!" she exclaimed. "Elsie *is* the King's Daughter after all; He can lead her to see how truly I care for her."

* * * *

Elsie, sinking into a cozy arm-chair in her own room after leaving the parlour, found a note on her table, and opening it, read,—

"Dear Elsie,—Cousin Hope is staying with us for a few days; I have asked the girls in our Circle to come over this evening and listen to one of her bright talks. You will surely come.—Lovingly." "Faith."

Dropping the note, Else donned wrappings, and ran across the way to the home of her intimate friend, where she found most of the girls awaiting her.

"Now, Cousin Hope," Faith began, "you know what talkers we girls are, so you will consider it a compliment that we are willing to sit still and be lectured for an hour."

"I do not know how to lecture," said the animated, earnest voice; "but you know how glad I always am to meet my girls," and she glanced lovingly around the circle. She it was, who had suggested to Faith the formation of a King's Daughter Circle, and had sent them the tiny crosses with a few words of loving greeting to each; so they did not seem strangers at this, their first meeting.

"What shall I talk about, girls?"

"Tell us what the other circles are doing. Tell us how to work for Him," said Ruth.

"What have you named your Circle? What do you want to do?"

"We have no name as yet except 'The Circle'; what shall we call it?"

"I sometimes think it might be called 'The Failure Circle', as far as I am concerned," said Esther. "I try so many things, only to be utterly disappointed at the result." Hope's bright face turned to the last speaker. "Do you remember the poet who suggests that the question for entrance to the Celestial City may be not 'Hast thou won?' but 'Hast thou *striven*?'"

"There are so many ways of working, such bright, glad things to do for Him, that I scarcely know where to begin." Then with a swift upward glance and a thought of the fair young stepmother, whose warm friend she was, she said, "What do you think of 'The Mothers' Aid Circle?'" The girls looked perplexed. "I mean a Circle to take care of the mothers; oh! girls, dear girls, do you dream what golden opportunities lie waiting at your doors! A young girl once said with face aglow, 'Pray for me that I may be a *dear* daughter.' A King's Daughter, she meant; do you think she was any less a precious daughter to some fond, loving mother?

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. 1 February, 1905 No. 9

AT SUNSET.

Margaret E. Sangster.

'Tt isn't the thing you do, dear,
It's the thing you leave undone
Which gives you a bit of a heartache
At the setting of the sun.
The tender word forgotten,
The letter you did not write,
The flower you might have sent, dear,
Are your haunting ghosts to-night.
The stone you might have lifted
Out of a brother's way,
The bit of heartsome counsel
You were hurried too much to say,
The loving touch of the hand, dear,
The gentle and winsome tone,
That you had no time or thought for,
With troubles enough of your own.

These little acts of kindness
So easily out of mind,
These chances to be angels
Which even mortals find,
They come in night and silence,
Each chill reproachful wraith,
When hope is faint and flagging,
And a blight has dropped on faith.
For life is all too short, dear,
And sorrow is all too great;
To suffer our slow compassion
That tarries until too late.
And it's not the thing you do, dear,
It's the thing you leave undone,
Which gives you the bitter heartache
At the setting of the sun.

THE KING'S DAUGHTER IN A HOMELY PALACE.

"And she is a King's Daughter!"

Marian Kent's brown eyes grew misty, as she sat alone in the deepening twilight.

It was New Year's Eve, and her thoughts were grave, almost distrustful ones. Only a few months before, she had taken up the combined duties of wife and step-mother, and the new position, notwithstanding the daily manifestation of the doctor's tender, protecting love, bore certain features of grave responsibility.

Elsie, the doctor's daughter, was not many years her junior, and though Marian had tried with her whole heart to be equal to the responsible position, she had seemingly failed. While treating her with marked politeness, Elsie resented any friendly advances, and, as the days went by, they seemed drifting farther and farther apart.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA